

近代における外国文学としての漢文学研究のあり方

—石崎又造草稿「日本支那文学史」を題材として—

[研究課題名]

明治期における漢学・洋学の交渉と「東洋学」

[研究代表者]

文学部国文学科教授 長 尾 直 茂

[石崎又造「日本支那文学史」をめぐって]

石崎又造（1905～1959）は『近世日本に於ける支那俗語文学史』（昭和 15 年 1940、弘文堂書房刊）の著者として知られる。同書は江戸時代における日中文化交渉に焦点を絞って通俗小説を主たる題材として研究したもので、その草分け的な業績であるとともに今もなお色褪せぬ価値を有する記念碑的な書籍でもある。石崎氏は中国の通俗的な文藝作品がいかに日本に入ってきて、それがまたいかに当時の日本人に吸収されたかということをも多くの事例を挙げつつ紹介する。そこに挙げられた書籍は膨大なものであり、それらを実際の書籍に即して新たに検証し直すことは今後のこの分野における研究にとって重要な意義を有する。ただ本書は江戸時代に限って論述された書であり、これより前の時代に関しては「序説」において若干触れられるばかりであった。

今回の学内共同研究における一つのテーマとして私は日中文化交渉の様相を探ることを課題と定め、この石崎氏の著書を題材として研究・調査を進めることとした。その結果、『近世日本に於ける支那俗語文学史』の前編ともいえるべき石崎氏の草稿が九州大学図書館に所蔵されることが判明した。その草稿こそが「日本支那文学史・前編 室町時代以前概説」である。本稿の表紙には「『近世日本における支那俗語文学史』既刊の前篇なり 都合により後篇の部のみ出版」と鉛筆書きされており、これが前掲書の前篇として執筆されたことが判明する。草稿は 600 字詰の原稿用紙 43 枚から成っており、全篇が（欄外の書き込みも含めて）石崎氏自筆と推定される。昭和 54 年に石崎氏の旧蔵書が一括して九州大学に入った際に併せて入庫したものである。九州大学が所蔵する石崎氏の草稿には、この他にも「近世漢学者の唐話学に就いて」「近世文学史上に於ける狂詩と戯文」等がある。このうち前者は昭和 10 年 7 月に行われた講演会の原稿であり、後者は本来『近世日本に於ける支那俗語文学史』に収録されるはずであった原稿である。後者については『近世日本に於ける支那俗語文学史』自跋により、昭和 13 年正月から 4 月初旬にかけて執筆されたことがわかっている。

こうした石崎氏の草稿に関する先行研究はなく、今回の学内共同研究における取り組みが初めての試みということになる。それゆえ先ず草稿を精読し、ワープロ打ちをして定稿を作成することから始めた。そのため学外の研究者の協力を仰ぎ、2008 年秋から 2009 年春にかけて草稿を共同で読み進める読書会を定期的に行った。この会には本共同研究のメンバー以外に、東京大学名誉教授戸川芳郎氏、国文学科の海外招聘客員教授として来日中であったライデン大学教授 W・J・ボート氏をはじめとする内外の日本漢学研究者に参加を要請した。その結果、草稿の大半を検討・翻刻し定稿化することができた。今後は他の草稿も翻刻し、これらを用いて石崎氏が考えていた日中文学交渉の様相を総合的に検討してゆきたいと考えている。